

第 15 回米百俵賞受賞

(平成 23 年 6 月 15 日表彰)

片桐 和子・昭吾 (新潟市)



インドのストリートチルドレンのため、子どもたちが安心して眠れる施設「憩いの村」を建設するなど、私財を投じて現地の子どもへの支援活動を行った。

■受賞時プロフィール

片桐夫妻は、平成 9 年の定年退職を機に、ボランティア団体・教育と環境の「爽(さわやか)」企画室を設立し、途上国の就学支援活動を始めた。県内でバザーなどを実施して寄附活動を行っていたが、平成 10 年、インドの国際協力 NGO「ニューホープ」の代表、エリアザール・ローズ氏との出会いをきっかけに、インドのスタディツアーに参加した。

そこで夫妻が見たものは、路上や駅のホームで危険と背中合わせの生活を強いられている、親のない子どもたちの姿だった。そして「この子どもたちを何と

か助けなければ」という強い思いに駆られ、行動を起こす。

平成 15 年、現地のローズ氏と協力しながら、ヤシの木が生い茂る広大な 36,000 平方メートルの原野を確保し、子どものための「憩いの村」の建設にとりかかった。最初に子どもたちが安心して眠れる宿泊施設、台所、食堂が完成した。

夫婦 2 人で協力し、無謀とも言える計画をスタートさせたが、私財はたった 1 年で底をついた。新潟県内の企業や友人・知人 300 か所に寄附を訴えたが、「なぜインドなのか」とほとんど断られる。昭吾氏は再就職した警備会社の夜勤で、

和子氏は手持ちの衣類を売るなどして、お金を工面した。

その後、マスコミ等での訴えの効果もあり、全国からの寄附金も得て、自転車の修理やサンダル製造などを学ぶ職業訓練所、心がすさんでいる子どもたちを癒す瞑想センター、音楽堂、農園、バラ園、診療所、図書館などを次々に完成させた。

平成 21 年からは新たに、学校建設の取り組みも始めた。当時学んでいた小さな教室は、机が足りず、子どもたちは土間に座って授業を受けていた。「皆の机があって、たくさんの本が並んでいる・・・そんな教室で勉強させてあげたい」片桐夫妻の思いに、新たな寄附団体も現れ、学校建設の夢が叶うこととなった。

自身の夢とも語るこのような支援活動を、日本の未来を担う子どもたちに伝えるための活動も忘れない。長岡市国際交流センターや国際協力団体等と連携しながら、多くの子どもたちにインドのストリートチルドレンの実態を伝えている。

■受賞後の活動

平成 24 年 3 月、開始から 3 年をかけて 8 クラスと特別室 2 室を持つ平屋建ての認可初等教育学校棟が完成した。

平成 25 年からは学校給食棟（調理室・ランチルーム）の建設と学校農園を整備。さらに平成 27 年には、校舎脇の 24,110 平方メートルの荒野にスポーツグラウンドをつくるため整地作業を開始するなど、「子どもの憩いの村」の建設・運営は平成 15 年以来、休むことなく続いた。

平成 28 年には念願のスポーツグラウンドが完成。片桐夫妻が長い間夢に見た教育の 4 本柱「知育・徳育・食育・体育」の全てが実現した。



上：平成 24 年に完成した学校

下：平成 25 年に完成した給食棟

そして平成 29 年度をもって夫妻はインドでの活動を現地で長年カウンターパートを務めた NGO の NEW HOPE に託し、撤退をした。平成 15 年から平成 30 年までの 15 年間でインドへの送金額は約 8,300 万円になり、現地の教育に活かされている。

■主な受賞歴

- 平成 21 年 第 21 回毎日国際交流賞
- 平成 22 年 第 3 回かめのり賞
- 平成 23 年 第 11 回ニューエルダー・シチズン大賞
- 平成 23 年 (公財) 社会貢献支援財団 社会貢献者賞「国際」
- 平成 27 年度 新潟県知事表彰「善行」
- 平成 28 年 第 19 回地球倫理推進賞「国際活動部門」、文部科学大臣賞
- 平成 28 年 (公財) ソロプチミスト 日本財団社会貢献賞
- 平成 29 年 第 10 回かめのり賞特別賞



▲平成 24 年に完成した学校のポーチにて